

## 徹底した5S活動で 約5,500日の無災害を継続！

グループ単位で行う「朝のミーティング」やライン監督者が職場巡回中に声をかけて危険を予知する「問いかけKY」など、工夫を凝らした安全衛生活動に加え、徹底した5S活動や各設備機械へのハード面の対策を通し、約5,500日もの無災害を継続している。

中興電機株式会社・埼玉県

埼玉・川口市に本社工場を置く中興電機株式会社。昭和11年の創業以来、高低圧配電盤・キュービクル高低圧受配電装置、変圧器などを製造しており、高い技術力に裏打ちされたこれらの製品は、業界の中でも高いシェアを占めている。

従業員数は川口工場および久喜工場を合わせて約80人ほどで、うち久喜工場には65人ほどの従業員が就労している。工場内のラインには、ボール盤やプレス機械をはじめさまざまな機械が稼働しており、事前の安全対策を確実に講じることが不可欠である。

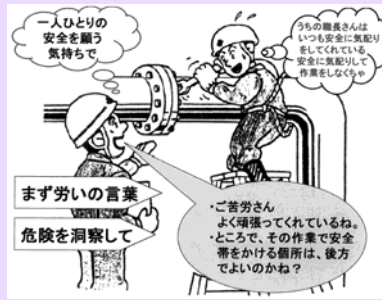
そうした背景から同社では、「朝のミーティング」や「問いかけKY」といった活動をはじめ、各設備機械へのステッカーの掲示や安全カバーの設置といったソフト・ハード両面からの安全対策により、約5,500日に及ぶ無災害を継続しており、その安全衛生活動の蓄積されたノウハウにより、川口・久喜両地域においてリーダー的存在とみなされている。

同社の安全衛生活動の中心的役割を担っているのが、社長室長である。平成11年に同社に着任する前には、同社の関連会社において安全衛生管理全般を担当しており、それらの活動で培ったノウハウを同社で展開することを考えたが、そのうえで1つの課題に直面した。

「例えば指示・伝達事項が作業員1人ひとりにまで徹底されていないなどの課題もあった」と社長室長が語るように、全員参加による安全衛生活動を組織的かつ効果的に進める必要性を感じた。このため、平成11年6月より「ゼロ災害・ゼロ疾病・全員参加運動」（以下「ゼロ災運動」）を導入し、全従業員一丸となって「安全の先取り」と「健康づくり運動」の2本柱を中心とした活動を展開することとした。



「タッチ・アンド・コール」の風景



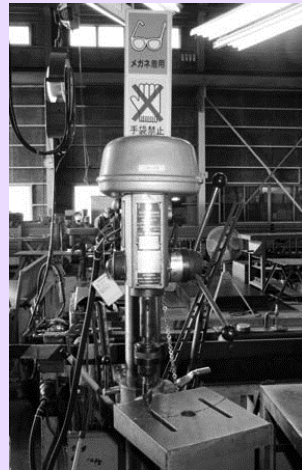
問いかけKYの例



「問いかけ」により作業に潜む危険を抽出



無災害日数は 5,500 日超に



ボール盤作業のメガネ着用・手袋禁止を徹底



「ゼロ災」の文字を至る所に掲示



ヘルメットの整理整頓も徹底



ゼロ災運動推進宣言事業場の証

## 「朝のミーティング」を通し安全衛生意識の高揚を図る

社長室長は、ゼロ災運動を進めるうえでいくつかの方法を用いてきたが、その中心となったのが「朝のミーティング」である。

具体的な進め方は、①整列・番号、②挨拶、③健康確認、④作業指示(KY含む)、⑤タッチ・アンド・コール——といったものだが、「各係長をリーダーとした、少人数のグループによるミーティング形式にしたことで、指示が作業員1人ひとりまでしっかり伝わり、安全衛生管理面はもちろん、コミュニケーションの円滑化など、多くの成果を得ることができました」と社長室長が語るように、作業員の職場規律の確立・安全意識の高揚につながったほか、管理監督者の指導性の向上などの効果も生んだ。

## 作業者への「問いかけ」を通して潜む“危険”を見抜く！

また、朝のミーティングとともに同社の安全衛生活動の中心的役割を担っているのが「問いかけKY」である。

これは、管理監督者が職場巡回中、作業中の作業者らに対し、まず「労い」の言葉をかけた後、行っている作業の危険要因などについて「問いかけ」を行い、監督者と作業者が一緒に危険を予知して対策を確認し合うという手法で、職場のKY活動に対する指導・援助、激励などを行うことを目的としたものである。まずライン管理者が作業者に労いの言葉をかけ、行われている作業に潜む危険を問いかけにより相互確認した後にフォローを行うという流れで進められる。

現在では、社長室長以外にも、所定の教育を終えた監督者が、適宜、問いかけKYを行っており、これに加えて安全巡視を徹底することにより、現場全体に「安全第一」の意識が定着しているといえる。

これらの活動を展開するうえでベースとなっているのが、全従業員を対象とした危険予知訓練の研修である。これは、危険感受性の向上などによるゼロ災運動の円滑な推進を目的としたもので、平成12年度に研修の実施計画を立て、中央労働災害防止協会の実施する、

- ①ゼロ災運動トップセミナー（取締役2名派遣）
- ②ゼロ災運動プログラム研修会（工場長・課長クラス4名派遣）
- ③危険予知活動トレーナー研修会（係長・主任クラス6名派遣）
- ④新交通危険予知活動トレーナー研修会（2名派遣）

—などの各研修会・セミナーに取締役らを派遣し、後の安全衛生活動に関わる“土台作り”を行った。一般の作業者は、セミナー参加者らを講師役に社内KY研修などに参加するほか、法定教育と合わせ、年間を通して絶え間ない安全衛生教育が行われており、こうした継続的な“意識付け”が、同社における安全衛生意識の醸成につながっているといえよう。

## 年2回工場間で「相互診断」を実施、指摘事項を半年後に確認

このほか、同社における安全衛生の特徴的な活動に、川口・久喜・両工場相互で行われている「相互診断」が挙げられる。これは、「安全衛生点検（指摘・改善）報告書」を使い、各工場の作業者が一方の工場に出向いて改善個所を指摘し、その半年後に再度工場に出向いて、指摘事項が改善されているかどうかを確認・フォローするというものである。最初の指摘と半年後の改善確認を合わせ、年2回、他工場の診断を行うことで「指摘のしっ放しを防ぐとともに、他工場の作業者が診断することで新たな発見もあります」と社長室長が語るように、相互診断により、両工場の安全衛生意識の一元的な向上につながっている。

また、相互診断の結果、成績が優秀な職場を評価し、安全衛生委員会などの場で発表している。これも活動のモチベーションを高めるのに効果を発揮している。

## 安全衛生点検（指摘・改善）報告書

様

主任及び 係長	課長及び 部長	工場長	社長	事務局

診断年月日：平成 年 月 日（ ）  
 診断工場名：川口工場・久喜工場 診断職場名：  
 診断者名：

### 安全衛生点検（指摘・改善）報告書

職場名 場所 立合者	指摘事項	改善・処理内容	担当者	納期
特記事項				

注) この記録用紙は点検日より3年間保存

H11-6-16作成

## 手作りの「安全衛生テスト」を管理監督者・作業員別に実施

このほかにも、安全衛生に関わる知識を管理監督者・作業員ごとに確認するための「理解度テスト」の実施が挙げられる。

概ね1ヵ月に2～3回ほど、管理監督者及び各作業員別に、時宜に合った内容のテストを実施している。

このテストは全て社長室長の手作りであり、全社一体となった安全衛生意識の高揚を図っている。

## 「番付表」など新たな仕掛けで無災害の継続を目指す

これらの活動のほかにも、

- ・ I K K運動（あわてたときに一呼吸考えて、安全確認を行う運動）
- ・ 5 S 定点撮影（現場の5 S活動状況を定期的に観測するため、一定の頻度で職場を定点撮影し、管理監督者が5段階評価しコメントを添付するもの。5 Sのレベルが時系列的に把握できる）
- ・ 5 S 番付表（各部署の5 Sの状況を幕下から横綱まで7段階で評価するもの。番付は半年毎に見直す）

など、工夫を凝らした独自の取組を行っている。